

菊次郎と不思議な米

作・はらぐちみきろう



菊次郎の作ったそば饅頭は大変おいしく町でも評判となり、もつていくとあつという間に売り切れてしまふほどでした。

ある日、菊次郎は、いつものようにそば饅頭を持って町に向かっています。

すると、途中、峠のお地藏様の前で元氣のない困った顔をした旅の人を見つけました。一度は通り過ぎた菊次郎でしたが、気になりもう一度戻って、「どうかしましたか」とたずねてみました。

菊次郎は、そば饅頭を売って暮らしていたから、大切なそば饅頭を見知らぬ旅人にあげれば、その日菊次郎は何も食べられないことはわかっていました。

旅人は、まるでわかってるように言いました。

「こんな大切なものをいただくわけにはいきません」

すると菊次郎は、笑顔でいいました。「何も心配はいりません。困ったときはお互い様です。さあどうぞ食べて下さい」

旅人はしばらく考えたあと「それでは遠慮なく頂戴します」といって、そば饅頭を全部食べ、元氣を取り戻しました。聞くと、この旅人は全国を行脚し、これから京の松尾山へ帰るところだと話しました。

そして、最後に旅人は、胸元から大事そうにしている小さな布袋を取り出し、菊次郎に差し出しました。「さあ、受け取って下さい。困ったことがあつたらこれを使って下さい」と言い残して。

菊次郎は、その日お金が一錢も入りませんが、すがすがしい気持ちでいっぱいでした。家に帰って旅人から貰った布袋をのぞいて見ました。

すると、中身はお米の稲粒が入っていました。菊次郎は、ただの稲粒を大事そうにしていた旅人のことを思い浮かべていました。そしてそれからしばらくしてのことです。何日も何日も大雨が降り続き、菊次郎の住む村や隣村も大きな被害を受けました。菊次郎のそば畑も全滅です。

「困ったことになった。そばが取れなくなつてしまった。本当に困ったことになった」と菊次郎は、来る日も来る日も途方に暮れていました。

元氣をなくした菊次郎は、ふといつか困った旅人にそば饅頭をあげたお礼に貰った稲粒のことを思い出しました。

そして困った時に使うようにと貰った稲粒を菊次郎は、大切に持っていました。

「よし、これを植えてみよう。お米を作ろう」と決心したのです。

それからというもの 毎日毎日菊次郎は、米作りに励みました。

菊次郎がお米を植えてから、毎日のように菊次郎の田を見に来る一人の旦那様がいました。顔を合わせるだけで話もせず、ただ菊次郎の仕事ぶりを見ているかのようでした。菊次郎は、どこのどなた様であろう、きつとどこかのえらいお人であろうと顔を合わ

むかしむかし、丹波地方のある村に菊次郎という気持ちのやさしい若者が、すんでいました。

家は貧しいながらも、親からゆずりうけたわずかなそば畑を一生懸命に育て、できたそばの実から、そば饅頭を作っては町まで売りに行っていました。

すると旅人は、「お金をおとしてしまい、もう何日も何も食べていません」とこたえました。

菊次郎は、かわいそうに思い、自分のそば饅頭で良ければと全部そば饅頭を差し出しました。

すたびにずっと思っていました。
そして、十月に入って植えたお米がぐんぐん大きく育ってきました。

菊次郎は、嬉しくてあの日の旅人に感謝しました。

しかし、ある日のことです。菊次郎は、稲の様子がおかしいことに気がつきました。今までに見たこともない大きなお米で、村の人にもそのお米を知っている人は一人もいません。

なんとも不思議な米だと隣村や町でもうわさになり、わざわざ見に来る人がいる程です。

変なお米は、次第に悪い噂となり、災いによる不吉なお米だと村人から恐れられるようになりました。そしてとうとう「焼いてしまえ」という声が出てくるようになったのです。

刈り入れを目前に、すっかり元気をなくした菊次郎はただ茫然と田んぼの縁に座り込んで悩んでいました。

そこへいつものようにあの旦那様がやってきました。

下を向いたまま考え込んでいる菊次郎を見て、旦那様が声をかけてきました。

「変わった米とは、やはりあなたの作ったお米でしたか」

旦那様と初めて話をする菊次郎でしたが、なぜかもうすでに心の通った信頼できる人のように感じて、今までのことを初めからずっと話して聞かせました。

菊次郎は、

「このままでは、せつかく作ったお米も売り物になりません」と言いました。

そして旦那様が言いました。

「もし良かったら、この米を全部私に売ってはいませんか」

菊次郎は、とてもびっくりしました。顔だけは知っていても詳しいことは何一つわからない人がどうして変わったお米を全部引き取ると言うのでしょうか。

菊次郎は、ここは旦那様を信じて旦那様の言う通りすることにしました。

稲刈りの終わった菊次郎の米は、町の旦那様のところへ運ばれました。菊次郎も一緒に歩いて行きました。

旦那様は、町の真ん中にある大きな酒蔵の当主だったのです。

菊次郎は、偉い人だとは思っていましたが、まさか酒蔵の当主とは想像もつきませんでした。

運びこまれたお米の量から鑑定が終わると、菊次郎は主人と呼ばれました。

まず菊次郎は自分のお米を買ってもらったことへのお礼を言いました。

今度は、蔵主の旦那様が言いました。

「うちは代々続いてきた造り酒屋だ。良い米を使い、良い酒つくりを行ない、良い酒を醸すのが、受け継いだ者の使命であり、後世に残すものである」と。

そして菊次郎を酒蔵の中に連れて行き、酒造りの現場を見せました。

たくさん蔵人たちが、忙しそうに走り

回っています。冷やんとする静かな蔵に入るとある小さな木桶の前を通りかかりました。

そこで菊次郎は、旦那様に言いました。

「この音は何の音ですか。それにいい香りもしていますか」

すると旦那様は、一瞬目が鋭くなり、菊次郎に言いました。

「そのはしごを使って桶の中を見てみなさい」

菊次郎は、旦那様の言う通り、桶の中を見てみました。

するとシュー、ゴコ、ブク、ブクというような音を繰り返して、白い泡をいっぱい出して醗酵していました。

これが、お酒になる醗だったのです。それは、菊次郎が生まれて初めて酒造りに触れた日となりました。

旦那様は、菊次郎にお米の代金を支払うと言いました。

「菊次郎が、丹精込めて作った米、一粒たりとも無駄にはすまいぞ」と。

菊次郎は、胸がいっぱいに熱くなりました。家に帰って、貰った米代を見てびっくりしました。思った以上に高い値段で買い取ってくれていたからです。菊次郎は、涙をいっぱい溜めて酒蔵の当主に感謝したのでした。

新しい年を迎えた春のころ、町の中が慌ただしいのです。連日のように旦那様の造り酒屋にたくさんの方が出入りしています。何かあったのだらうかと菊次郎はずっと気になっていました。

もう居ても立ってもいられない菊次郎は、酒

蔵から出てきた人をつかまえて聞きました。「この騒ぎはいったいどうしたのでしょうか。何かあったのでしょうか」と。

すると出てきた人が言いました。

「今度、この酒蔵の酒が、全国諸白酒品評会で金賞をとったんだよ」

菊次郎は、よく分からないながらも、何やらいいことのように安心しました。

それから間もなくして、菊次郎の家に突然お客様がやってきました。たいそう綺麗な若いお嬢様です。

「菊次郎様ですか。父の使いでやって参りました」

そうです。町の旦那様の造り酒屋のお嬢様でした。この度の金賞受賞の祝賀会への招待の順番が回ってきて、是非とも来て欲しいとの旦那様の配慮でした。

菊次郎は、その様なおめでたいお祝いの席に自分のような者が呼ばれるのは、おこがましく感じ、一度は断りました。

しかしまた次の日もお嬢様が来て、是非とも来て欲しいとの旦那様の気持ちは聞きました。菊次郎は、そこまでおっしゃって下さるのならとお言葉に甘えることにしました。それに、また断ったらあのお嬢様がきつと使いで来るであらう、わざわざ遠い町からこの村まで歩いてくるのは、大変だということもありました。

金賞受賞の祝賀会には、たくさんの方が来ていました。酒宴の席で、菊次郎は、早速旦那様にお祝いの挨拶をしました。

今度は、旦那様が菊次郎にお礼を言いました。今度金賞を取った酒は、菊次郎の米を使って造った酒であつたのです。そして旦那様から、菊次郎に稲作の終わった後は、うちの酒蔵で蔵男として働いてみないかと誘いの話もありました。

とにかく菊次郎はうれしくなり、酒宴もたいそう盛り上がりました。

この年も菊次郎は、一生懸命にお米を作りました。そしてまた全部のお米を旦那様が買い取ってくれました。

稲作の終わった菊次郎は、蔵男として旦那様の酒蔵で働くことにしました。とにかく酒造りを一から習うため菊次郎は、何でもしました。正直者で心優しい菊次郎は、杜氏さんやほかの蔵男さんたちにもたいそうかわいがられました。

菊次郎がまたあの小さな木桶の前を通ると、今までにかいだことのない香りがするのに気付きました。すぐに杜氏さんに話してみました。杜氏さんもこの木桶の酒は違うと薄々感じ取っていた様子でした。

杜氏さんは、すぐに当主の旦那様へこの木桶のことを話しました。旦那様は、この木桶の醪を少しばかり採ってみるよう菊次郎に言いました。

菊次郎は、ひしゃくで浦いている醪をすくうとそのまま旦那様へ手渡しました。

香り、味とも全然違う酒に旦那様も驚きは隠せず、杜氏とも顔を見合わせました杜氏も旦那様の考えていることが分かりました。

菊次郎は、会話もなく何やら察している二人の様子が全然理解できず、不思議そうに眺めていました。

それから新しい年を迎え、春も間近、忙しい酒造りも終わりました。春になりまた全国諸白酒品評会がやって来ました。

菊次郎の蔵からも酒を出し、審査結果を待っているようで、酒蔵で働く人たちも落ち着かない様子で、そわそわしています。数日後、審査の結果が届きました。

旦那様がゆっくり審査通知書を取り出すと驚きのあまり言葉が出ません。そうです、昨年を引き続きまたも金賞に入つたのです。酒蔵の中は、喜びに沸きかえりました。

この金賞受賞の話は、酒造りが終わり、家に帰った杜氏さんや蔵人さんたちの耳にもすぐに入りました。

2年連続の金賞受賞の話は、あつという間に全国に広まりました。例によつて、また旦那様の造り酒屋では、祝賀会が開かれました。昨年以上にたくさんの人が全国からお祝いに駆けつけました。

酒宴での話題は、どうして2年連続して金賞を取ったのか、どうすれば金賞を取れる酒が造れるのかということで持ちきりです。当主の挨拶でその答えは分かりました。

「とにかく米を半分になるまでよく磨き、一番寒い日の一番冷え込む明け方に造りを行う、湧きの日にちを一月と長くとり、ゆっくり

あわてず仕込んだこと、そして何よりも一番は、背の高い大粒の今までの米とは全く違う新しい米を使ったこと」など話しました。

この酒蔵が使ったお米がいちやく有名になり、菊次郎の作った米だとわかると毎日のように造り酒屋の人たちがやってきては、菊次郎の作った米を買いたいと言うのです。

菊次郎は、連日のように米を買いに来るためすっかり困っていました。

このお米は、たくさん採れるわけでもなく、限られたお米を丹精込めて作っているだけなのです。それに一番は、働かせてもらっている旦那様のことがあつたからなのです。

菊次郎は、旦那様をたずねてお米のことを話しました。

「旦那様、全国からわざわざ私の米が欲しいと出向いてくるので困っています」と言いました。

そして、このお米は旦那様への思いを込めて作っていたことも話しました。

すると旦那様は笑みを浮かべて言いました。「やつぱりそうだったか、すまんことをしたな。どうだろう菊次郎、あの米だけでは、とても来る人全部は賄えない。そこで米ではなく、稲穂を一本ずつ分けるということにしてはどうか」

菊次郎は感動しました。良いお酒が造れるお米の種を欲しい人に分け与えよということです。

良いものを決して自分一人のものとしないうるお米の寛大な姿勢に心を打たれ、この人に生

涯ついでいこうと心にかたく決めたのです。

菊次郎は、採つておいた稲穂を欲しい人にただで分け与え、稲穂を貰った人は、何回もお礼を言つては全国に戻っていききました。北は関八州から、南は伊丹、池田、鴻池、伏見、加賀、筑前にまで及んだのです。

この年もまた菊次郎は、一生懸命に米を作りました。そしてまた全部のお米を主人の酒蔵に買ってもらいました。

米作りも終わり、蔵人となつた菊次郎は酒造りに夢中になっていました。そして自分の作った米を使った酒造りにも携わるようになっていました。いよいよ2年連続して金賞に入つた酒造りに入つたのです。杜氏さんを中心に蔵人全員が心をつにして酒造りが行われました。蔵の中は、緊張の日々が続きました。

しばらくして、いつもの小さな木桶から素晴らしい香りが漂ってきました。杜氏さんと菊次郎は顔を合わせました。何やら考えていることは同じのようです。杜氏さんが当主に諸白酒品評会に出す酒が順調であることを告げました。

春になり、今年も全国諸白酒品評会の季節がやって来ました。誰もが菊次郎たちの作った酒が金賞を取れるかどうかという話題で持ちきりです。入賞すれば3回連続となり、今までに続けて3回金賞を取る蔵はどこにもなかったのです。

とうとう審査の結果が届きました。当主の旦那様が緊張の面持ちでゆっくり審査通知書を取り出しました。



すると旦那様の目に涙が溢れ、言葉も出ません。そうです、金賞に入賞したのです。旦那様は、蔵で働く人ひとりひとりにお礼を述べて回りました。

恒例の祝賀会が開かれると、全国からこの日を待っていたと思わんばかりの人がたくさん集まりました。そしてこの中には、菊次郎から貰った稲穂を大切に育て、その米を使ってこの蔵と同じようにして作った酒が入賞したという知らせをもってやって来た酒蔵の人もいて、たいそう賑やかな酒宴となりました。そして当主である旦那様からお礼の言葉と同時に、この日に合わせ、嬉しい知らせがありました。

なんと、旦那様の一人娘であるお嬢様と菊次郎の婚姻がまとまったというのです。菊次郎は、ひと目会った日からずっとこのお嬢様のことを慕い続けていたのです。この夜、若い二人を皆が祝福しました。そして、またもうひとつ、この酒宴の席で旦那様から杜氏さんと菊次郎に話を持ちかけました。

「3回続けて金賞を取れた大切な米が、名無しの権兵衛ではあまりにも申し訳ない、と言って菊次郎の米では、あまりにもそっけない。そこで何か良い名前をつけたらどうか」と。

杜氏さんと菊次郎は顔を見合わせました。三人ともこのお米には言葉では言い表せない愛着を持っていましたから、その二人が承知するのに時間はかかりませんでした。それからしばらくして、旦那様は菊次郎の父上となり、一緒に暮らしていました。

「父上、この前の米の名前の話ですが、杜氏の申すには、私の作った米であるから自分の好きな名前をつけるようにと言ったきり、ご無沙汰なのです」

と菊次郎は父上に言いました。「それではお前のつけた名前によいではないか」と父上も言いました。

菊次郎は、ずうっと考えていた名前をつけることにしました。

杜氏さんの名前「亀衛門」の亀と、背の高い稲穂にたくさんさんの稲をたわわにつけた稲穂から「亀の穂」と命名しました。このお米は、酒造りの歴史を変える有名な品種となりました。また、このお米から造られたお酒は、華やかな香りと味わいで、とても良い酒に仕上がりました。

そして菊次郎から分け与えられ全国に広まった「亀の穂」からも良い酒が出来るようになりました。

お酒の産地も広がり、今の灘や伏見は、菊次郎の酒蔵とも近いこともあり、特に有名な産地になりました。また、遠くは筑前(福岡県)や肥前(佐賀県)まで有名になりました。

永い年月が去った今日でも、菊次郎たちを偲ぶかのように、その功績を見ることが出来ます。

菊次郎の「菊」の字は、今日お酒の名前につけられたり、酒蔵の名前に使われたりしています。

菊次郎の「亀の穂」は、今日最も有名な酒米の「山田錦」の親である「山田穂」の親となったお米なのです。

3回続けて金賞を取ったお酒造りの技法は、今日の吟醸造りといって吟醸酒を造る製法であったのです。

菊次郎の人生は、旅人にそば饅頭をあげたときから大きく変わっていききました。旅人、酒蔵の当主、杜氏さんなど人との出会いが、いかに大切なことであるかが窺えます。

人を思いやり、大切にすることを心持った菊次郎は、やがて酒蔵の当主となりました。たくさんの人から信頼される人となりました。金賞常連蔵となった酒蔵もたいそう繁盛し、いつまでも幸せに暮らしたということです。